まる○福連携2023

異業種との対話から福祉を探る

一般社団法人福祉システム北海道
髙橋 銀司代表理事

❖エピソード５　安平町長　及川 秀一郎さん

おいかわ・しゅういちろう　1965年生まれ、安平町（旧追分町）出身。追分高等学校を卒業後、旧追分町役場職員となり、「安平町まちづくり基本条例」など数多くの計画策定に携わる。勤務の傍ら、日大法学部法律学科（通信教育）卒業。教育委員会事務局次長を務めた後、2018年の町長選に出馬し当選、同４月から現職。

●町長のお仕事にはどういうものがありますか？

行政規模によりますが、首長が安平町の役場のトップです。とはいえ、自分は元職員なので、町長になっても、役場の同志と仕事をしているという感覚です。

●町職員時代の仕事を教えてください。

私は合併前の旧追分町職員で、はじめは福祉係でした。介護保険制度ができる前の時代で、保育所、生涯学習、障害者福祉などいろいろありました。大変ですが充実した仕事をし、その後計画作成に携わりました。2006年（平成18年）に旧早来町と合併し、総務で総合計画、町づくり基本条例、教育委員会では生涯学習計画など、町の根幹となる取り組みに携わりました。当時、他の分野に配属されていたら、町長選に出馬しなかったかもしれません。

●出馬した理由は？

旧追分町時代は旧国鉄職員や北海道庁職員出身職員（福祉担当）から町長が続き、その後、町職員出身の町長が続く中で、自分も世代の中の一人としてバトンを受けました。

●町長の仕事をする上で、大切にしていることはありますか？

スピード感を大事にしています。個人でもブログを使っていましたが、関係する方、お世話になる人が増えて、FacebookやInstagram、Xなども使用してつながりができています。イベントや行事が終わったら数分後にはＳＮＳにイベントの様子などを上げるようにしています。おかげで、情報発信が多い町として紹介いただいています。

●スピード感を大事にするきっかけは？

企画サイドに配属されたころに、パソコンで情報発信をしました。町おこし研究所という半官半民の団体でホームページも作り、議事録をすぐに上げていました。

ある出張時の夜、当時の地域プロジェクトマネージャーから「前澤友作さんのTwitterで、８億円寄付する（ファッション通信サイトＺＯＺＯＴＯＷＮ退任後に元社長の前澤さんがTwitterを通じて実施したお金配り実験）というツイートが出ていますよ」と言われ、すぐに応募し、４校統合型の義務教育学校「早来学園」の関係で500万円をいただきました。昨年もまた寄付のツイートが出て、今度はエネルギー関係ということで応募し1500万円をいただき、スポーツニッポンでも報じられました。早く行動することと、行動することが大事と思います。また、すぐに行動できるように、いつも準備しています。

●スピード感を持つことで新鮮でリアルな情報発信につながっているということですか？

そうです。広報で取材したものを、安平町はお茶の間のテレビで配信しており、文字情報もボタンで検索できる。町議会は生中継で見られますし、災害の時には災害情報に切り替えられるのが強みです。７月にはデジタルDX推進計画もできました。

●順調に進んでいると言えそうです。

はい。実は運がいいのか、失敗と言えることはあまりないのです。町長になって４カ月目に北海道胆振東部地震が起こり、新型コロナウイルス感染症流行にもあっていますが。

総務時代には、選挙事務はスピードが大事でしたが、スピード感を追求するあまり、途中でミスに気づき再チェックで逆に遅れたという失敗があり、チェックの大事さを感じました。

●介護保険制度ができる前からのご経験から、福祉や介護の変化を感じることがありますか？

昔は家族福祉が主流でした。通信制大学で福祉や法律について学んでいた当時、20代で海外研修の公募に受かり、オランダなどの福祉先進国で健康な高齢者を見てきました。その後、企画サイドの部署で、現在「ぬくもりセンター」と呼んでいる総合福祉センターを作り、その近くに「ぽっぽ苑」「はーと苑」という、自立して生活しながら給食も出る、個室もあり、共同生活もできる施設がつくられました。

胆振東部地震では町内の特養も被害を受けたので、道と国に町の要望を聞き入れてもらい、地震やその後のコロナ対策も含めた、福祉的な仮設住宅も作っていただきました。

●いろいろな学び、収集した情報を、行政に生かしているのですね。

諸先輩方のいいところを真似するようにして、受け取ってきたバトンを次の方へ受け継いでいこうと思います。

●福祉関連で安平町のオリジナルと言えるような事業はありますか？

医療関係では、震災後に町内の診療所の問題があり、苫小牧東病院さんのご協力をいただきました。それ以降も現在１日３回の病院バスを出していただき、施設に入所する際の判定や学校健診などにもご協力いただいています。

その他にもいろいろな転換期と感じています。日本ユニセフ協会から「子どもにやさしいまちづくり事業」実践自治体に選ばれました。震災で早来中学校が大きな被害を受けたことから、小・中学４校統合型の義務教育学校として今年開校した「早来学園」は、地域の方にも活用していただく図書室や特別教室も備えています。病児保育や病後児保育も課題になっており、日本一の公教育を目指すだけでなく、「お年寄りにとってもやさしい町」というユニバーサルデザインも入れ、教育委員会、福祉や建築も一体となって活動しています。同事業の取り組み状況を評価したチェックリストを公表することで、移住・定住者の増加にもつながっています。

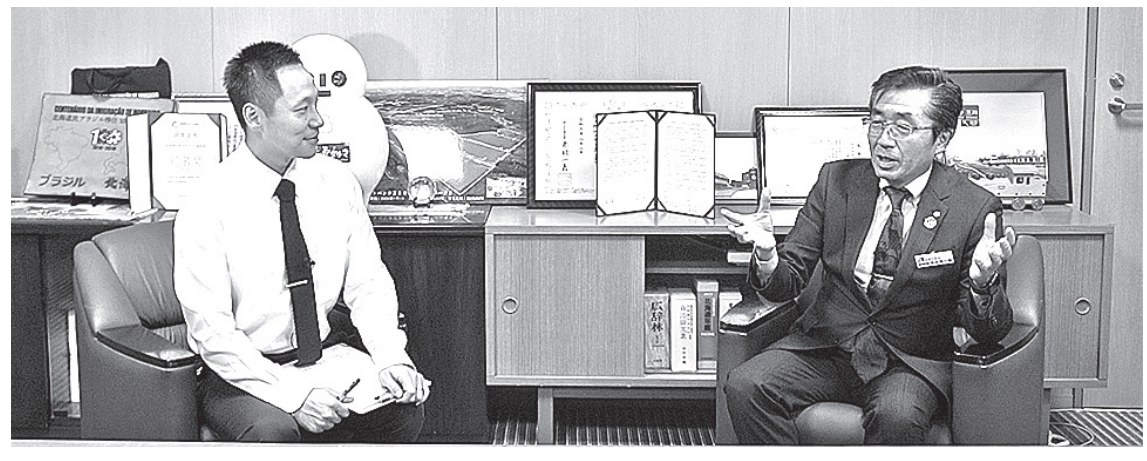
昨年は20年ぶりに人口が「社会増」に転じました。新規就農事業では、２年間の就農経験で特産のアサヒメロン栽培などに携わった新規就農者が、道の駅の産直販売を開業し、今度は新たな新規就農者を迎え入れる講師を務めるなど、新しい循環が起きています。

デジタル化、キャッシュレス化を推進するため、町と連携した新たなポイント制度「ポイントあびら」（買い物300円ごとに１ポイント付与、100ポイント＝100円で利用できる）を発行しており、ボランティアや健康教室に参加すると50ポイントを付与しています。運転免許証の返納奨励金なども、あびらポイントで10万円分を支給し、これは3000万円分の買い物をしないともらえないポイント数です。ポイントは町内加盟店でしか使えないので、健康増進やボランティアの後押しになるとともに、人との交流を生み、そこから輪ができて循環しています。

介護人材確保でも新たな動きがあります。今年から栗山町にある北海道介護福祉学校と連携協定を結び、追分高校から入学した学生を学資的に支援し、卒業後に地元の介護福祉施設に職員として戻ってもらう形です。町としては「育てたい、暮らしたい、帰りたい」というフレーズも使い、広域的な人材循環を目指しています。

●町長は100キロマラソンをしているとのことですが、介護や福祉も体力勝負と言われます。体力づくりで何かアドバイスはありますか？

私は持続力があるほうだと思います。通信教育も単位をコツコツ取得しました。100ページの総合計画を立てるのは大変だと思いますが、１日３ページやれば３カ月でできてしまう。マラソンも同様にフルマラソンの記録などをアレンジしながら準備し、町長になる前の年に100キロマラソンを完走できました。マラソンを始めたのは先輩から聞いてやってみようと思ったから。踏み出す勇気もあります。他の方たちにも動き出しの大切さを伝えていきたいですね。



◎インタビュアー◎

たかはし・ぎんじ　1987年、小清水町出身。北海道介護福祉学校や北海道医療大卒業後、障害福祉事業所に勤務の傍ら、北星学園大大学院社会福祉学研究科修士課程修了。オホーツク社会福祉専門学校の専任教員を経て、現在、日本医療大総合福祉学部助教およびEzo'n music提携ジャーナリスト（ＮＰＯ経営・福祉系）としても活動。社会福祉士、介護福祉士。

日本医療大　Ezo'n music

「○（まる）福連携プラス」YouTube配信中

インタビューの様子などを視聴できる動画チャンネル「○（まる）福連携プラス」がYouTubeで配信中。紙面に掲載し切れない内容を含め10分ほどにまとめている。

○福連携プラス